

再興九谷の生産



連房式登窯の基礎(八幡若杉窯跡) 古墳の斜面を利用した階段状の登窯で、全長約15mを測る。若杉から当地へ移転した時に構築された窯で、手前に燃烧室(胴木間)を置き、房と呼ばれた焼成室が5室ほど続いていたとみられる。

江戸時代初期、九州の有田で開始された磁器の国内生産は、約四〇年後には加賀地方へも伝えられ「九谷窯」の開窯となった。

大聖寺川の上流に所在する登窯は、発掘調査で「明暦貳歳(一六五六)／八月／九谷」銘の色見いろみに加えて、色絵磁器や素地の白磁製品が出土したことから、色絵磁器の製造を目的とした築窯とみられている。また、隣接する江戸時代後期の吉田屋窯は、九谷で行われた陶業を再興する形で開設された窯場であった。

その江戸後期、加賀藩では経済的な行詰まりを打開するため、殖産興業を奨励し、金沢の春日山窯を藩窯として開いた。またこれを発端に、加賀の各地では次々と新しい窯場が開設され、



再興九谷焼の物原(八幡若杉窯跡) 物原とは窯業生産の欠損品などを捨てた場所を云う。焼成に失敗した再興九谷の器物は、登窯の斜面に厚く堆積し「ちやわんやま」と呼ばれていた。

幕末、明治と発展するなかで、色絵装飾が華やかな九谷焼の陶芸世界が形成されていった。

この九谷焼発展のなか、江戸前期の



天保三年の在銘陶器 八幡の窯跡では文政7年(1824)銘の出土品から、開窯の時期が古くなった。写真の陶器には、窯を管理した「橋本屋安右衛門」の名前が見える。

「古九谷」に対して、江戸後期に稼働した金沢の春日山窯や民山窯、能美郡の若杉窯・小野窯・蓮代寺窯、江沼郡の吉田屋窯・宮本屋窯・松山窯などの諸窯を「再興九谷」と総称するようになった。

その若杉窯は、若杉村の林八兵衛が、春日山窯の陶工の本多貞吉を招き、文化八年(一八一二)に開窯したものである。藩の若杉陶器所となってから、火災を契機に八幡地内へ移転し、文政の頃には加賀藩から派遣された金沢の商人橋本屋安右衛門に管理されていた。また、小松の松屋菊三郎がはじめた蓮

代寺窯には、粟生屋源右衛門も加わり、白磁に五彩の絵付けを施した製品を完成させたことで、明治期に発展した九谷焼の基盤となった。

これら再興九谷の窯場が能美郡の丘陵地に多く開設されたのは、花坂村で良質な陶石が発見されこれに加えて、瓦生産を担う職人を含め、窯業生産に適した環境が整っていたことに因るものである。

(垣内光次郎)



窯跡の調査風景(蓮代寺窯跡) 蓮代寺町に残る「ちやわんやま」の調査では、窯道具や素焼き品が出土したことから、再興九谷の蓮代寺窯はこの近くに所在したとみられている。

(写真の提供、対象物の所蔵は石川県埋蔵文化財センター)